タレント
ダンカン

special × interview

代表取締役
角掛 真平

鳶工事で歩み出して成長一途――事業柱を増やして高みを目指す

静岡県を中心に、鳶工事全般を担う職人集団『角掛工業』。同社を牽引する角掛社長を中心に若き職人が揃う企業だ。増員と規模拡大を図り、2015年には法人化。鳶工事を柱に、塗装・板金工事、リフォーム全般、太陽光発電関連事業と新たな分野にも挑戦しながら事業の幅を広げており、成長一途だ。本日はタレントのダンカン氏が同社を訪問し、社長にお話を伺った。

TSUNOKAKE
株式会社角掛工業

静岡県藤枝市青南町３丁目21-6

――早速ですが、角掛社長の歩みからお聞かせ下さい。

十代半ばで社会に出たのですが、自分が何をしていきたいのか分からずにいました。でも、ずっとそうしているわけにもいきません。同年代の人たちは学校へ行っていますから、自分は学校へ行かないなら働こう、と。そこで、知人のお父さんが鳶の会社を経営されていたので、そちらでお世話になることにしました。とはいえ、当時は鳶に興味を持っていたわけではなく、最初はただ何となく。よく「鳶は現場の花形」だと言われますが、それを知ったのは仕事をはじめてから数年経ったころでした。でも、今振り返ってみれば、あの時に飛び込んだのが鳶の業界で良かったと思っています。

――縁があったのだと思います。こうして経営者にまでなられたわけですから、この仕事が社長にとって天職だったのでしょうね。その会社で修業後に独立を？

はい。16歳で入社して6年間修業を積み、22歳で独立を果たしました。一通り仕事も覚え、自分の力を試してみたくて独立を決めたんです。

―― 22歳の若さで独立されて、若いが故のご苦労もされたのでは？

最初は資金もなかったので、裸一貫でスタートしたんですよ。仕事もお客様もゼロの状態でしたが、ありがたいことに様々な現場に呼ばれて応援に行くことからはじめました。応援に行った先で人脈も広がり、自分で事業を手掛けていくための地盤を築くことができました。

――現場から声が掛かるというのは、社長が職人として求められていた証です。見込まれていたのでしょうね。これまでを振り返ってみて、会社としての分岐点はありましたか。

近隣に同業者があるのですが、そちらの下請けに入ったことが分岐点になりました。それまでは、自社で資材を持たずに仕事をしていたのですが、そちらでお世話になったことで、自社で資材を購入できるようになったんです。たとえば、1棟分の資材を揃えようと思ったら100万円以上。資金力がなければ、自社で資材を持つことも簡単ではないんです。

――それも、会社としてステップアップした証というわけですね。ご創業から変わらず、ずっと鳶工事を？

はい。マンションなどの足場も手掛けていますが、戸建て住宅の足場工事を特に得意としています。また、これから先のことを考えれば足場工事だけでなく、事業柱を打ち立てることでリスクマネジメントも図りたいと考えました。それに、年齢を重ねてくると、鳶の仕事は体力的に厳しい。そこで、塗装工事や板金工事も手掛けていこうと準備に動いています。もともと東京で十数年、板金工事に携わっていた兄と一緒に仕事をしようという話になり、良い機会なので新たな事業柱にするべく動き出したんです。私自身はずっと鳶職人として歩んできたので、塗装や板金については素人同然。専門の職人を入れて新たな体制を築いているところでして、私も専門の職人に教わりつつ、自分なりに勉強も進めています。皆で、足場工事だけでなく塗装・板金工事も一括して受注できる会社へと成長させ、将来的にはそこを当社の強みにしていきたいですね。

――着実に仕事の間口を広げておられますね。そうなると人材も必要になりますが、この業界は人手不足と聞きます。そのあたり、御社はいかがですか。

独立以降、少しずつ社員を入れてきまして、ここ数年で定着し、約15名にまで増えました。ありがたいことに大きな苦労もありませんでしたし、人にも恵まれて順調です。この業界は若手が不足していると言いますが、当社は私と同級生の社員が4人ほどおり、後はみな年下。若い人材が揃っています。

――職人の高齢化に頭を悩ませる会社も多い中、若手が揃っているとは、今後が楽しみですね。最後にこれからのビジョンをお聞かせ下さい。

ビジョンを描くことがビジョンでしょうか（笑）。創業からずっと、ただ前だけを向き、一つひとつの現場を大切にしながら走ってきました。人にも仕事にも恵まれて、2015年には法人化を遂げることができたんです。ただ、ずっと必死だったので、経営理念もこだわりも、将来のビジョンもしっかりと定まらないまま今日に至るんです。法人にして5年になりますし、そろそろ企業としてのあり方を見極め、目標を具体的に立てて、それに向けて成長していきたいですね。

――前だけを見て必死に仕事をしていたら、今に至っていたというのも充分にご立派です。今後のご活躍も期待しています。

（2020年8月取材）

「経営理念や信念などはないとおっしゃった角掛社長ですが、将来を見据えて事業柱を増やし、ご自身も職人として勉強を続けておられる。それがまさに経営方針であり、また確固たる信念をお持ちだと感じました。肩の力が抜けていて、自然体でもある。22歳の若さで独立を果たされ、ここまで走ってこられたのは素晴らしいことです。陰ながらになりますが、応援しています！」　ダンカン・談

チーム力が良い仕事を生む

Column

▼「職人気質で、人とコミュニケーションを取ることが苦手」と自身について話した角掛社長。しかし、経営者となれば「苦手」では済まされない。社員とのコミュニケーションはもちろんのこと、取引先とも丁寧に意思疎通を図り、異業種交流会などにも積極的に参加しているそうだ。そのような中で、いつも社員にかけるのは、「一緒に仕事をする仲間として、仲良くやっていこう」という言葉。「誰しも大きさの大小はあれ、不満はあるかもしれません。でも、縁あって集まり、共に仕事をする今、お互いを尊重しながら、同じ方向を見て仕事をし、達成感もやり甲斐も共有していきたいんです」と社長。足場工事は一人ではできない。チームの一糸乱れぬ連携が重要だ。危険が伴う現場では、阿吽の呼吸も大切になる。チームワークの良さは安全をもたらし、高品質の仕事を生み、ひいてはお客様からの信頼につながる。「一致団結」が、『角掛工業』をさらなる高みへと導いていくはずだ。

© 2020 HOUDOU-TSUSHINSHA Co.,Ltd.